

東洋文庫所藏漢籍善本解題目錄 經部

周 艷 編

(翻譯補訂) 會谷佳光

前 言

東洋文庫の漢籍目錄はすでに冊子體で刊行されている⁽¹⁾。中でも岩崎文庫中の漢籍の古鈔本・古刊本・古活字版については、東洋文庫日本研究班(舊東洋文庫日本研究委員會)によって詳細な解題が作成され、『岩崎文庫貴重書書誌解題』に収録された⁽²⁾。しかしながら中國で刊行された宋元版をはじめとする漢籍については、冊子體目錄や東洋文庫ホームページの藏書檢索によって簡略な書誌を知りうるのみで、ほとんど解題が作成されておらず、實際にどのような資料であるかは、東洋文庫に來館しないと知り得ない狀況にあった。幸い二〇一二年より『新しい漢字漢文教育』誌上で東洋文庫の漢籍善本紹介を擔當させていただく機會を得、これまで全四回計二十八點の解題を掲載させていた。その原稿を執筆しながら、このような漢籍解題を『東洋文庫書報』誌上で繼續的に發表できないかと考えていた。そんな折、二〇一三年四月一日から六月十六日まで、南京大學圖書館から外國人客員研究員として、周艷女士

が東洋文庫に滞在された。

南京大學圖書館では善本特藏室に研究員として所屬されると伺っていたので、田仲一成圖書部長と相談し、滞
在期間中の調査研究活動の一つとして漢籍經部の貴重書解題の作成を提案し、快くお引き受け頂き、わずか二箇月半
の間にたいへん資料的價値の高い解題目錄の原稿を完成された。なかでも中國に傳わらず、これまで散佚したと考え
られていた明代の韻書『正韻便覽』が、世界で東洋文庫にのみ所藏されていることを再發見し、その價値を顯彰され
たことは、大きな成果の一つと言つてよからう。

なお周艷女史は、今回漢籍の書誌調査の方法をほぼ獨學で習得しながら調査されたため、書誌の取り方や表記に統
一性を闕く箇所などが見受けられた。そこで御本人の了解を得た上で適宜表記の統一・内容の補訂を行い、さらに補
訂箇所の確認をお願いし、必要に応じて修正を加えた。その際、御歸國後の調査で得られた成果も新たに盛り込むこ
とができた。末筆ながら、たゆまぬ努力で東洋文庫漢籍解題目錄の編纂に先鞭を附けられた周艷女史に心より御禮申
上げたい。

會谷 佳光

(公益財団法人 東洋文庫研究員)

注

(1) 既刊の東洋文庫漢籍分類目錄には、次のものがある。

『増補東洋文庫漢籍叢書分類目録』（東洋文庫、一九六五年）

東洋學文獻センター連絡協議會『漢籍分類目録 集部 東洋文庫之部』（東洋文庫、一九六七年三月）

『東洋文庫所藏漢籍分類目録 經部』（東洋文庫、一九七八年十二月）

『東洋文庫所藏漢籍分類目録 史部』（東洋文庫、一九八六年十二月）

『東洋文庫所藏漢籍分類目録 子部』（東洋文庫、一九九三年四月）

漢籍の解題を著録する『岩崎文庫貴重書解題』には、次のものがある。

東洋文庫日本研究委員會『岩崎文庫貴重書書誌解題 I』（東洋文庫、一九九〇年三月）

東洋文庫日本研究委員會『岩崎文庫貴重書書誌解題 III』（東洋文庫、二〇〇〇年三月）

東洋文庫日本研究班『岩崎文庫貴重書書誌解題 IV』（東洋文庫、二〇〇四年三月）

(2)

凡 例

一、本目錄に収録したのは、『東洋文庫所藏漢籍分類目錄 經部』著録の貴重書指定漢籍のうち、請求記號が「XI」で始まるもの二十部である。なお拓本の「千字文一卷 梁周興嗣撰 唐馬懷素書 元刊本」（請求記號XI・2・9）を除く。

二、解題の記載項目は、書名、卷數、編著者、出版事項、冊數、請求記號、匡郭の形狀・寸法、界線の有無、行數・字數、版心の形狀、序跋・本文の構成、版心題、刻工、刊記、印記（舊藏者に關する簡略な説明を附す）、編著者の簡略な紹介、書物の内容梗概、他機關の收藏狀況、版本の系譜等からなるが、書物の内容次第で項目を増減した。

三、書物の内容については、王重民『中國善本書提要』（上海古籍出版社、一九八三年八月）の例に倣い、『欽定四庫全書總目』に収録されるものには詳しい解題を作らず、「詳しくは『四庫總目』某部某類を參照。」のように記した。『總目』に誤りや補充を必要とする箇所があれば、考證・補充を加えた。『欽定四庫全書總目』に収録されないものは関連資料を詳しく収録した。

四、匡郭の寸法は、原則として卷第一第一丁表の右邊・上邊の内寸を計測した。残本の場合は、最初の卷の第一丁表を計測し、計測箇所を注記した。行格は「幾行幾字」あるいは「幾行幾字注文小字雙行幾字」の形式で著録し、大字の字數を確定しにくい時は「注文小字雙行幾字」と著録した。いずれも半丁の行數である。

五、他機關の收藏狀況については、出版事項がはっきりしている場合のみ記し、出版事項がはっきりせず「某朝刊本」としか著録のしようがない場合は記さなかつた。日本・中國・臺灣・歐米各國等の收藏機關について、藏書目録等を使って收藏狀況の確認を行った。

六、字體は極力舊字體を用いた。引用文中、推測・補足した文字は「〔 〕」附きで記し、小字で印刷・書寫されている文字は「〈 〉」附きで記した。改行されている箇所は「／」で示した。

解題

〔四書五經讀本〕 清雍正中內府刊本 三十冊 XI 3 A a 5

單邊縱二〇・七cm横一四cm（大學）、有界九行十七字注文小字雙行、無魚尾白口、句四聲點。

〔四書〕

大學一卷 首淳熙己酉（十六年、一一八九）朱熹「大學章句序」、次「大學」。版心題「大學」、又丁數を記す。
中庸一卷 首淳熙己酉朱熹「中庸章句序」、次「中庸」。版心題「中庸」、又丁數を記す。

論語十卷 首「論語序說」、次「論語卷之一」、以下至卷之十。版心題「論語」、又篇名・卷次・丁數を記す。

孟子七卷 首「孟子序說」、次「孟子卷之一」、以下至卷之七。版心題「孟子」、又篇名・卷次・丁數を記す。

〔五經〕

周易四卷 首「周易序」、次「周易本義目錄」、次「周易本義圖目」、次「圖說」（版心）、次「周易本義卦歌」、次「筮儀」、次「周易卷之一」、以下至卷之四。版心題「周易」、又篇名・卷次・丁數を記す。

書經六卷 首淳熙四年（一一七七）朱熹「詩經傳序」、次「詩經篇目」、次「詩經卷之一」、以下至卷之八。版心題「書經」、又篇名・卷次・丁數を記す。

詩經八卷 首嘉定己巳（二年、一二〇九）蔡沈「書經集傳序」、次「書經篇目」、次「書經卷之一」、以下至卷之六。

版心題「詩經」、又篇名・卷次・丁數を記す。

禮記十卷 首至治壬戌（二年、一三三二）陳澧「禮記集說序」、次「禮記篇目」、次「禮記卷之一」、以下至卷之十。

版心題「禮記」、又篇名・卷次・丁數を記す。

「春秋三十卷 首「春秋傳序」、次「春秋傳綱領」、次「春秋篇目」、次「春秋諸國興廢說」、次「春秋提要」、次「春秋卷之一」、以下至卷之三十。版心題「春秋」、又篇名・卷次・丁數を記す。

無刊記。「玄」「胤」に闕筆あり。帙題簽題「殿版四書五經合刻」（書貼）。印記「夢鷗／僊館」（朱文方印）、「黎陽」（白文長印）。

本書は、宋・朱熹『四書章句集注』十九卷、同『周易本義』四卷、宋・蔡沈『書集傳』六卷、朱熹『詩集傳』八卷、元・陳澧『禮記集說』十卷、宋・胡安國『春秋傳』三十卷からなり、避諱の状況から雍正期の刊本と見られる。陶湘『清代殿板書目』（民國二十五年（一九三六）序排印本、『陶氏書目』所收）は、上記の諸書を雍正朝の刊本として著録し、さらに次のように記す。

右四書五經讀本六十七卷、頒國子監及八旗官學各直省學院、凡坊本刻均以此爲程式、世稱監本。春秋猶用胡傳、高宗中年、場屋除四傳合題之制、專用左氏傳繙譯、春秋即用左氏傳。道光二年、欽定春秋左氏傳讀本頒行天下、胡氏傳不廢而廢。

なお陶氏『書目』は「春秋胡氏傳二十卷」と著録するが、本書と卷数が合わないもので、誤りであろう。なお東洋文庫所藏本は『書經』と『詩經』の順が逆になっているが、これは分帙の都合によるものと見られる。

吉林大學圖書館に「四書五經讀本」の名で收藏されている。

〔欽定篆文六經四書〕

清李光地等奉勅輯 清康熙末內府校刊本

十四册

XI, 3, A a 4

岩崎文庫

左右雙邊縱二二・一 cm 横一四・四 cm、有界八行十二字、單白魚尾白口、無點。

首總閱官・南書房校閱官・校對官。

〔六經〕

周易一卷 首「周易篇目」、次「周易上經第一」、以下至雜卦傳第十（不分卷、全十二篇）。版心題「易」、又丁數を記す。

尚書四卷 首「尚書篇目」、次「尚書／虞書」、以下夏書・商書・周書。版心題「書」、又丁數を記す。

毛詩四卷 首「毛詩篇目」、次「毛詩／國風」、以下小雅・大雅・頌。版心題「詩」、又篇名・丁數を記す。

春秋一卷 首「春秋篇目」、次「春秋」。版心題「春秋」、又篇名・丁數を記す。

周禮六卷 首「周禮篇目」、次「周禮卷之二」、以下至卷之六。版心題「周禮」、又卷次・丁數を記す。

儀禮十七卷 首「儀禮篇目」、次「儀禮卷第一」、以下至卷第十七。版心題「儀禮」、又卷次・丁數を記す。

〔四書〕

大學一卷 首「大學」。版心題「大學」、又丁數を記す。

中庸一卷 首「中庸」。版心題「中庸」、又丁數を記す。

論語十卷 首「論語卷之二」、以下至卷之十。版心題「論語」、又卷次・丁數を記す。
孟子七卷 首「孟子卷之一」、以下至卷之七。版心題「孟子」、又卷次・丁數を記す。

刊記「翰林院檢討加一級〈臣〉張照／編修加一級〈臣〉薄海奉／旨恭校刊」（儀禮卷第十七末・孟子卷之七末）。題
簽題「欽定篆文六經四書」（書貼）、帙題簽題「欽定篆文六經四書（殿版）」（書貼）。無印。

李光地、字晉卿、號厚齋、福建安溪の人。康熙九年（一六七〇）進士、官は文淵閣大學士に至る。康熙朝の理學の名臣。『李文貞公全集』・『榕村全書』が傳わる。事蹟は『清史稿』卷第二百六十二本傳に詳しい。本書は、李光地・王揆を總閱官として、小篆を用いて六經四書の本文を記したものである。その出版経緯は、清・李清植『文貞公年譜』卷下・康熙五十四年條に次のように見える。

六月、疏丐休致。予假二年。八月、赴熱河辭陛。…公叩首請曰、西師之役、臣每欲有云、然臣事上久、知上更歷持重、必無輕舉妄動之事、惟乞深爲留意。上許之、乃曰、卿雖家居、政事有不便者、當密以聞。公頓首謝、隨進篆文五經一部、乞更賜刊刻、以廣篆法之傳。上卽頒付內殿、如其請。

本書の『周易』全十二篇を十二卷とみなせば、六經の卷數が四十四卷となり、明・朱陸樾『萬卷堂書目』卷一經解類の「六經篆文四十四卷 陳鳳梧」と一致するが、『文貞公年譜』に言う「篆文五經」と陳鳳梧の『六經篆文』との關係は不明である。

陶湘『清代殿板書目』・『中國古籍善本書目』に著録され、國立公文書館（內閣文庫）・中國國家圖書館等、多くの機關に所藏される。他に光緒九年（一八八三）に上海同文書局が出版した石印本がある。

周易經傳集程朱解附錄纂註十四卷首一卷末一卷 卽周易會通 元董真卿輯 元至元二年翠巖精舍刊本 十六册 XI

215 岩崎文庫

雙邊縱二〇cm横一二・四cm、有界十一行十九字注文小字雙行二十二字、雙順魚尾小黑口、無點、有耳格（無粹）。

首董真卿「周易會通總目」、次天曆元年（一三二八）董真卿「周易經傳集程朱解附錄纂註序」、次元統二年（一三三三）董僕序、次「周易會通凡例」、次「周易會通引用諸書群賢姓氏」、次董真卿「周易經傳歷代因革」、次「易程子傳序」、次「易程子序」、次「古易朱子後序」、次「易學啓蒙序」、次董真卿「程子說易綱領」、次同「朱子說易綱領」、次同「朱子易圖附錄纂註」、次「雙湖胡先生易圖」、次「周易經傳集程朱解附錄纂註卷第一／後學鄱陽董真卿編集」、以下至卷第十四、次董真卿「朱子啓蒙五贊附錄纂註」、次同「朱子筮儀附錄纂註」。版心題「易會通」、又卷次・丁數を記す。木記「至元二年（一三三六）丙子／翠巖精舍新刊」（總目末）。題簽題「周易纂註」（書貼）。無印。

董真卿、字季真、鄱陽の人。胡一桂に學ぶ。事蹟は『續通志』卷第五百五十三に詳しい。本書は『四庫總目提要』經部易類に収録されている。書名の意味は『提要』に詳しく説かれているので参照されたい。『中華再造善本』所收本はこの版本を底本として景印したものである。『中國古籍善本書目』に著録され、中國國家圖書館にも所藏される。本書の通行本に『通志堂經解』本がある。

呂氏家塾讀詩記三十二卷 宋呂祖謙撰 明史樹德等校 明萬曆四十一年序南京吏部陳龍光蘇進等據顧起元家藏本重刊

左右雙邊縱二〇・七cm横一三・九cm、有界十行二十字注文小字雙行、單魚尾白口、無點。

首萬曆癸丑（四十一年、一六一三）顧起元「重刻呂氏讀詩記序」、次南京吏部後學全校「姓氏」（版心）、次嘉靖辛卯（十年、一五三一）陸鈞「刻呂氏讀詩記序」、次淳熙壬寅（九年、一一八二）朱熹「呂氏家塾讀詩記序」、次「呂氏家塾讀詩記姓氏」、次「呂氏家塾讀詩記目錄」、次「呂氏家塾讀詩記引用書目」、次「呂氏家塾讀詩記卷第一」、以下至卷第三十二。版心題「呂氏讀詩記」、又卷次・丁數・刻工名・刻字數を記す。刻工は、孟純禮・羅・劉奉・段志・段惠・施元・賀文言。無刊記。卷第二十七の第三十六・第三十七丁原闕。印記「藤田鏗峰／臧書之記」（朱文長印）。東洋史學者藤田豊八（一八六九～一九二九）舊藏。第一・二冊表紙に「淩鴻杰」墨筆書人あり。

呂祖謙、字伯恭、金華の人。隆興元年（一一六三）進士、また博學宏詞科に合格し、官は直祕閣著作郎・國史院編修に至る。事蹟は『宋史』卷第四百三十四本傳に詳しい。本書は『詩經』について論じた著作であり、陳振孫『直齋書錄解題』卷二詩類に「博采諸家、存其名氏、先列訓詁、後陳文義、剪裁貫穿、如出一手、己意有所發明、則別出之。詩學之詳正、未有逾於此書者也。」とある。朱熹の『詩經』に對する早年時の見解を比較的多く傳え、朱熹の初期思想や宋代の『詩經』流派を研究する上で參考價值が高い。

『欽定四庫全書總目』經部詩類所收。『中國古籍善本書目』に著録され、國內外に數多く收藏される。

儀禮十七卷 闕卷第十至第十七 漢鄭玄注（嘉慶二十年吳門黃氏讀未見書齋）據宋嚴州刊本景刊 士禮居黃氏叢書

左右雙邊縱二一・一 cm 横一四・四 cm、有界十四行二十四字乃至二十五字注文小字雙行三十二字前後、單魚尾白口、無點。

首「儀禮卷第一／士冠禮第一 儀禮 鄭氏注」、以下至卷第九。版心題「儀」、又卷次・丁數・刻工名を記す。刻工は、方達・徐宗・葛珮・葉明・方通・王德・方迂・楊思・劉忠・任文・黃祥・丁悅・黃著・范・陳暹・陳盛。各卷卷末に經・注の字數を記す。卷第九第四丁裏第五丁を闕く。印記「義／皇上人」(白文方印)。木箱入。蓋の内側に「明治庚戌(一九一〇)孟冬月日下部東作題」と書し(印記「東／作」(白文方印)・「翠雨／山房」(朱文方印))、身の側面に「影宋槧儀禮 全箱」と記した墨筆附箋を貼附す。また帙題簽に「宋槧儀禮 鳴雀署」と書し(印記「日下／東作」(白文方印)・「子／陽」(朱文方印))、各冊の題簽に「宋槧儀禮鄭氏注 鳴鶴題簽」の文字を書す(印記「東作」(白文圓印)・「子／陽」(朱文方印))。明治期の書法家日下部鳴鶴(一八三八―一九二二)の舊藏書。本姓田中、名東作、字子陽、彦根の人。別號東嶼・翠雨・野鶴・老鶴・鶴叟。明治十三年(一八八〇)に來日した楊守敬に漢魏六朝の書法を學んだ。鳴鶴流の創始者で、日本近代書道の父と稱され、中林梧竹・巖谷一六とともに「明治三筆」とも稱される。

本書について、『東洋文庫所藏漢籍分類目錄 經部』が「宋刊本」と著録するのは誤りである。これは嘉慶二十年(二八二五)に黃丕烈が刊行した『士禮居黃氏叢書』本である。士禮居本には、これを底本にした同治九年(一八七〇) 楚北崇文書局重刊本(東洋文庫藏 I. 5. C. 8)・光緒十三年(一八八七) 上海蜚英館石印本(東洋文庫藏 V.

5 B 45) があり、蜚英館石印本を底本にした民國四年(一九一五)上海石竹山房石印本がある。崇文書局本は土禮居本の刻工(版心)の多くを脱漏し、文字、特に避諱字の字様が土禮居本と異なり、蜚英館本は底本の界線や文字を補正し(詳しくは本稿末「土禮居黃氏叢書本『儀禮』三本字樣對照表」を参照)、石竹山房本は蜚英館本をもとに匡郭を太くしてある。現在各大學・藏書機關が收藏するのはこれら三種の版本が多い。

『土禮居黃氏叢書』本の原本(嘉慶二十年本)は、東京大學東洋文化研究所・京都大學人文科學研究所(東方文化學院京都研究所舊藏本)等に所藏される。

禮書一百五十卷 存卷第八至第二十四 宋陳祥道撰 宋刊元明通修本 三冊 XI 1 2 岩崎文庫

左右雙邊縱二・一 cm 横一五・七 cm、有界十三行二十一字注文小字雙行二十字至三十餘字不等、雙魚尾小黒口又白口、無點、有圖。

首「禮書卷第八」、以下至卷第二十四。版心題「禮書」「禮」、又ままた刻字數・卷次・丁數・刻工名を記す。刻工は、國・厚・卞玉・祐・壽・德・山・才・上・文・天。無刊記。「玄」「桓」に闕筆あり。卷第二十一卷首第二行に「左宣義郎太常博士陳祥道上進」とあり。無印。料紙は白麻紙で、卷第十四第三丁・卷第十八第二丁のみ黄麻紙を用いる。一行の字數はまれに増減があり、特に卷第十八第二丁は二十字から二十三字の行までである。改裝、古丹色表紙。陳祥道、字用之、福州の人。治平四年(一〇六七)進士、官は太常博士に至る。『宋元學案』卷九十八荆公新學略に收載される。著作に『禮書』の他『論語全解』十卷があり、ともに『四庫全書』に收録される。宋・李廌『師友

談記』には、元祐七年（一〇九二）に『禮圖・儀禮注』を上進し、さらにかつて『禮圖』一百五十卷・『儀禮說』六十餘卷を著したとある。『禮書』はあるいは彼の禮學關係の著述の總稱かもしれない。陳氏は三禮の學に精通し、その著『禮書』は當時非常に重んぜられた。『欽定四庫全書總目』經部禮類・余嘉錫『四庫提要辨證』卷一經部禮類に詳しい。

阿部隆一氏によれば、明代の補刻部分は版心に小黑口を混じえ、刻字數・刻工名のない白口には最も新しく補刻された丁があり、宋刊とは言いながら殘存部分は僅少で、ほとんどが元の至元年間の補刻であり、そのため宋代の避諱は嚴密には行われていないとのことである（『日本國見在宋元版本志經部』「禮書」條を参照）。『中國古籍善本書目』は本書を「元至正七年福州路儒學刻明修本」と著録する。宋刊元明通修本の完本は東京大學東洋文化研究所・靜嘉堂文庫、中國國家圖書館・上海圖書館等に所藏される。

日講春秋解義六十四卷總說一卷 清庫勒納李光地等撰 清乾隆二年內府刊本 十六冊 XI.3.A.6 岩崎文庫
 雙邊縱一八cm横一三・三cm、有界九行十八字注文小字雙行、雙魚尾小黑口、句四聲點。
 首「聖祖仁皇帝御製日講春秋解義序」、次乾隆丁巳（二年、一七三七）高宗「日講春秋解義序」、次「乾隆二年正月二十四日奉旨開載監修總裁分撰校訂校錄校刊監造諸臣名銜」、次「日講春秋解義卷目」、次「日講春秋解義總說」、次「日講春秋解義」（隱公時の諸侯國の概略。以下各公の冒頭に載す）、次「日講春秋解義卷之一」、以下至卷之六十四。版心題「日講春秋解義」、又卷次・丁數を記す。無刊記。「玄」を「元」に避け、「胤」「弘」に闕筆あり。高

宗御製序末に印記「惟精／惟二」（白文方印）・「乾隆／宸翰」（朱文方印）有り。題簽題「日講春秋解義」（書貼）。庫勒納、姓瓜爾佳氏、滿洲鑲藍旗の人。康熙五年、監生より吏部筆帖式に任じられた。官は翰林院掌院學士・禮部尚書を経て、吏部尚書に至る。かつて『明史』總裁・『三朝國史』副總裁に充てられた（『滿族大辭典』（遼寧大學出版社、一九九〇年）「庫呼納」條を參照）。

本書は康熙帝の命で編纂された「日講」類の一つで、清代の經筵制度の産物である。乾隆帝の序によれば、本書は康熙帝の時代にすでに原稿が出来上がっており、日講の諸臣は多く南宋の胡安國の説を採用したが、胡氏の説には牽強附會が多かったため、康熙帝は慎重な態度を持って刊行を急ぐことはなかった。雍正七年（一七二九）、雍正帝は允禮・張廷玉・方苞等に命じて新たに審定し、數度の御覽を経てようやく完成した。本書の體例は、句ごとに「春秋」を解釋するもので、まず經文を擧げ、次に一格下げた『左傳』・『公羊』・『穀梁』の解釋を引用して、經文と三傳に對して小字雙行で注釋を附し、次にさらに一格下げた編纂者の立場でその句に對して訓講する、というものである。卷首の「總說」は先人の『春秋』及び「三傳」に對する議論を輯録したものである（故宮博物院圖書館・遼寧省圖書館『清代內府刻書目錄解題』（紫禁城出版社、一九九五年九月）を參照）。陶湘『清代殿板書目』は「康熙年勅纂、雍正年勅訂、乾隆三年刻。」とする。

『欽定四庫全書總目』經部春秋類所收。『中國古籍善本書目』には著録されないが、翁連溪『中國古籍善本總目』（綏裝書局、二〇〇五年五月）に著録され、國立國會圖書館・靜嘉堂文庫・北京大學圖書館をはじめ數多く傳存する。

孝經註疏九卷 唐玄宗御注 宋邢昺疏 明崇禎二年古虞毛氏汲古閣刊本 十三經註疏之一 一冊 XI 3.A.a.12
 左右雙邊縱一七・四cm横一一・八cm、有界九行二十一字注文小字單行二十字疏文小字雙行二十字、無魚尾白口、無點。

首宋邢昺等「孝經註疏序」、次傳注「序」(版心)、次「唐玄宗」「孝經序」、次「孝經正義／宋邢昺較」、次「孝經註疏卷第一／宋邢昺較」、以下至卷第九。封面題「孝經註疏」。版心題「孝經疏」、又卷次・丁數を記す。木記「皇明崇禎二年歲在屠／維大荒落古虞毛氏鐫」(卷第九末、白文)。題簽題「孝經註疏」(書貼)。印記「但願／長醉不／願醒」(朱文方印)。

本書は毛晉の汲古閣で刊行された『十三經註疏』の零本である。『欽定四庫全書總目』は經部孝經類に収録し、『孝經正義』と名附けている。『中國古籍善本書目』經部總類に「十三經註疏三百三十三卷」の子目として著録され、北京大學圖書館・復旦大學圖書館・東京大學東洋文化研究所・東京都立中央圖書館・中央大學等をはじめ數多く傳存する。東洋文庫では紙質の劣化のため閲覧禁止資料となっている。

孝經衍義一百卷首二卷 清葉方藹等奉勅撰 康熙二十九年序内府刊本 三十冊 XI 3.A.a.11 岩崎文庫
 雙邊縱一八・二cm横一三・四cm、有界九行十八字注文小字雙行、雙魚尾小黒口、句四聲點。

首康熙二十九年(一六九〇)「御製孝經衍義序」、次康熙二十一年葉方藹等「恭進孝經衍義表」、次「凡例」、次「孝

經行義總目」、次「孝經行義目錄」、次「孝經行義卷首上」、次「孝經行義卷首下」、次「孝經行義卷一」、以下至卷一百。版心題「孝經行義」、又卷次・丁數を記す。無刊記。印記「金印／景遂」（白文方印）。

康熙帝の「序」によれば、本書は順治帝の時代に編纂が開始されたものの完成せず、康熙帝の時代になって完成したものである。體例は宋儒・眞徳秀『大學衍義』に倣い、例を挙げながら經義を敷衍解釋する形式の著作であり、章句・訓詁の體裁は取っていない。『欽定四庫全書總目』子部儒家類に「御定孝經行義」の名で収録され、陶湘『清代殿板書目』にも著録される。『中國古籍善本書目』には著録されていないが、東京大學總合圖書館をはじめ國內外の多くの圖書館に收藏される。

他に順治帝の時代に著された張能鱗『孝經行義』四十七卷（米國議會圖書館藏）があり、王重民の考察によれば、これが本書の藍本であるとのことである（詳しくは王重民『中國善本書提要』經部孝經類を参照）。王氏が見た張能鱗の『孝經行義』は鈔本であるが、その刊本が現在東京大學總合圖書館に所藏され、稿本とやや異同がある。

論語十卷首一卷 卽論語纂疏 宋朱熹集註 宋趙順孫纂疏 宋末刊本 二十册 XI:214

左右雙邊縱二三・二cm横一四・二cm、有界九行二十字注文低一格大字單行疏文低一格小字雙行、雙順魚尾白口、無點。

首洪天錫「語孟序」（版心）、次趙順孫「讀論孟集註綱領」、次同「讀論語孟子法」、次「論語／朱子集註序說 後學趙順孫纂疏」（版心題「論語序說」）、次「論語卷第一／朱子集註 後學趙順孫纂疏」、以下至卷第十。無版心題。版

心上部に大小刻字数、中部に卷次、下部に丁数・刻工名を記す。刻工は、黄升・藍宗・顧震・蔡仁・黃宥・藍・史祖・劉俊・馬良・吳興・徐侃・賈眞・蔡成・沈祖・沈禮・李斗文・蔡元道・徐嵩・劉文・陳金・許怡・丁銓・章永。「玄」「匡」「恒」「貞」「徵」「樹」「讓」「桓」「完」「慎」「敦」「廓」等に闕筆あり。卷第八「〇子曰吾嘗終日不食終夜不寢以思」句、無益「句」不如學也」にのみ「句」字による斷句あり。印記「毛斧季／收臧印」（朱文長方印）・「汲古／閣」（朱文方印）・「毛氏／家臧」（白文方印）、「謾聞／齋臧／祕笈」（白文方印）・「曾在／顧竹／泉處」（朱文方印）・「家臧／北宋／印經」（白文方印）、「江安傳／沅叔攷／臧善本」（白文方印）。また「謾聞齋顧氏臧」「宋板初／印趙順／孫論語／纂疏／汲古／閣藏／第二函」と記された墨筆附箋有り（同「第四函」にも有り）。これらによれば、清初の毛辰（字斧季。毛晉の子）汲古閣、清末の顧錫麒、傅增湘（一八七二～一九五〇）の舊藏書である。また第一冊末丁の左欄外に「癸丑臆月沈曾植敬觀」墨筆書入あり。沈曾植（一八五〇～一九二二）、字子培、浙江嘉興の人。光緒六年（一八八〇）進士。

趙順孫、字和仲、縉雲の人。南宋淳祐十年（一二五〇）進士、吏部尚書・參知政事等の職に任じられた。著に『四書纂疏』・『孝宗繫年錄』・『中興名臣言行錄』等がある。事蹟は清・陸心源『宋史翼』卷第十七に詳しい。『四書纂疏』は「欽定四庫全書總目」經部四書類に収録される。

本書の出版事項について、『東洋文庫所藏漢籍分類目錄 經部』は長澤規矩也の鑑定に従って「元覆宋刊本」とするが、本書の舊藏者傅增湘は宋刊とする（『藏園群書經眼錄』經部四書類「論語纂疏十卷」條を参照）。阿部隆一『日本國見在宋元版本志經部』「論語〔纂疏〕一〇卷」條は、刻工について考證して宋末刊とし、理宗後期の寶祐咸

淳間（一二五三）一二七四）に括蒼（浙江省）の學官で刊刻されたものと推測する。これに従うべきであろう。『論語纂疏』は『中國古籍善本書目』に著録されていない。なお『四書纂疏』には元刊本があり、明末清初の季振宜の舊藏で、清末の藏書家陸心源を経て、現在靜嘉堂文庫に所藏される。傅增湘はかつてこれを見て、家藏の宋刊『論語纂疏』と行格が一致することを根據に、宋刊本に由來するものとみなした（詳しくは『藏園群書經眼錄』經部四書類「四書纂疏二十六卷」條を參照）。

重刊埤雅二十卷 宋陸佃撰 明成化九年葉氏廣勤書堂刊本 改裝三冊（原裝二冊） XI 3 A a 3 岩崎文庫
雙邊縱一七・五cm横一〇・三cm、有界十行十九字、雙順魚尾小黒口、無點。

首天運庚申（正統五年（一四四〇）？）張存「重刊埤雅序」、次宣和七年（一二二五）陸宰「埤雅序」、次「埤雅目錄」、次「重刊埤雅卷之一／中大夫守尚書左丞上柱國吳郡開國公賜紫金魚袋陸佃撰」、以下至卷之二十。版心題「埤雅」、又卷次・丁數を記す。木記「成化九年（一四七三）歲次癸巳／葉氏廣勤書堂新刊」（陸宰「埤雅序」末）。題簽題「埤雅」（直書）。朱墨書入有り。印記「自／演」（朱文方印）・「說溪」（白文方印）、「稱意館／臧書記」（朱文長印）・「吉家／氏藏」（白文方印）、「養／安」（鐘形印）、「養安院藏書」（朱文長印）、「正健／珍藏」（朱文長印）、「江戶市野光／彥臧書記」（朱文長印）・「迷庵」（朱文方印）・「市野光彦」（白文方印）、「弘前醫官澗／江氏藏書記」（朱文長印）。織豊／江戶前期の醫師吉田宗恂（一五五八／一六一〇、家號稱意館）、織豊／江戶前期の醫師曲直瀬正琳（一五六四／一六一一）、曲直瀬養安院家第十代曲直瀬正健、江戶中後期の儒者市野迷庵（一七六五／一八二

六)、江戸後期の醫者・儒者澀江拙齋(一八〇五～一八五八)の舊藏。卷首・卷第十一首の匡郭内右下に「自／演」印、卷第二十末の匡郭内左下に「説溪」印がそれぞれ捺され、かつ兩印の印泥の風合が似通っていることから、本来は卷第十・卷第十一の間で二冊に分冊されていて、その状態の時にこの二印が捺されたと見られる。

陸佃、字農師、號陶山、越州山陰の人。熙寧三年(一〇七〇)進士。官は尚書右丞に至る。史家によって禮家名數の學に精通していたと稱される。事蹟は『宋史』卷三百四十三本傳に詳しい。本書が「埤雅」と名附けられたのは、『爾雅』の輔翼とする意圖によるものであり、四庫館臣は「其說諸物、大抵略於形狀、而詳於名義。」と評している。詳しくは『欽定四庫全書總目』經部小學類「埤雅二十卷」條を参照。

本書の版本はともが多いが、この版らしきものは『中國古籍善本書目』に著録されておらず、比較的稀見のものである。

許氏說文解字五音韻譜十二卷 宋李燾撰 明(嘉靖十一年孫氏)刊本 二十四冊 XI,3.A.1 岩崎文庫

雙邊縱二三・二cm横一六・六cm、有界七行十四字注文小字雙行二十字、雙魚尾小黑口、無點。

首許慎「許氏說文」(徐鉉等校定)、次建光元年(一一二)許沖(上書)、次雍熙三年(九八六)徐鉉等(進新校定說文解字表)(附「新修字義」)、次雍熙三年李昉等(牒)、次「許氏說文解字五音韻譜卷一」、以下至卷十二。

版心題「說文」、又卷次・丁數を記す。無刊記。無印。第一冊卷首副葉に「諸家親意」「許氏說文解字目」等の書入あり。

李燾、字仁甫、一字子眞、號巽巖、眉州丹稜の人。紹興八年（一一三八）進士。官は敷文閣學士に至り、光祿大夫を贈られた。諡文簡。事蹟は『宋史』卷第三百八十八に詳しい。本書は、李燾が徐鍇の『說文解字韻譜』をもとに、その部首順の排列を『集韻』の音韻順に組み替えたものである（詳しくは『欽定四庫全書總目』經部小學類存目を参照）。徐鍇は、徐鉉の弟で、字楚金、廣陵の人、「小徐」と呼ばれる。文字學に精通し、南唐に仕え、官は内史舎人に至る。生涯非常に多くの著述を残したが、現在傳わるのは『說文解字繫傳』四十卷・『說文解字韻譜』十卷のみ。事蹟は宋・馬令『南唐書』卷第十四に詳しい。兄の徐鉉は、字鼎臣、五代吳の校書郎、南唐の知制誥・翰林學士・吏部尚書を歴任し、のち李煜に隨つて宋に歸順し、官は散騎常侍に至る。「徐騎省」と呼ばれる。詔によって句中正等と『說文解字』を校定した。事蹟は『南唐書』卷第二十三に詳しい。

沈津『美國哈佛大學哈佛燕京圖書館藏中文善本書志』（上海辭書出版社、一九九九年二月）「明刻本重刊許氏說文解字五音韻譜」條は、本書の明刊本七種を挙げる。弘治十四年（一五〇二）車玉刊本・嘉靖七年（一五二八）郭兩山刊本・萬曆四十七年（一六一九）張經世等刊本・天啓七年（一六二七）世裕堂刊本、明版三種（うち一種は陳大科序を持つ燕京圖書館所藏本）である。國內では、京都大學人文科學研究所等が嘉靖十一年序孫氏刊本・萬曆二十六年崇川陳大科白狼書社刊本・天啓七年世裕堂刊本を所藏する。また『四庫全書存目叢書』經部第一八七冊には浙江圖書館所藏の弘治十四年車玉刊本が収録されている。東洋文庫所藏本はこのうち嘉靖十一年序孫氏刊本と同版であり、その京都大學人文科學研究所藏本には嘉靖壬辰（十一年）孫甫「紀刊說文」が収録されている。國立公文書館内閣文庫には「明嘉靖十一年序刊 經廠」が所藏されている。

大廣益會玉篇三十卷 梁顧野王撰 唐孫強補 宋陳彭年等重修 元至正二十六年〔南山書〕院刊本 五册 XI 2, 18
岩崎文庫

雙邊縦二〇・九cm横一二・七cm、有界十二行小字雙行二十八字、雙順魚尾小黑口、無點。

首大中祥符六年（一〇一三）〔牒〕、次〔顧野王〕「大廣益會玉篇序」、次〔顧野王〕「進玉篇啟」、次「大廣益會玉篇總目」、次「玉篇廣韻指南」、次「大廣益會玉篇卷第一」、以下至卷三十。版心題「玉」「玉篇」、又卷次・丁數を記す。木記「至正丙午（二十六年、一三六六）良月／□□□院新某」（「玉篇廣韻指南」末）、又闕字部分に「南山書」と墨筆で補寫す。本來は胡蝶装であったと見られるが、綾装に改装した際に版心の方に裏打ち紙を突き出したこと、もとの書型よりも小口部分が約1cm前後廣くなっている。印記「開□／□□」（白文方印）、「石鼓軒／書畫記」（朱文長印）、「追蠡子／鑒賞章」（朱文方印）・「市島泰／交通印」（朱文方印）、「碧□／下呂／□子」（朱文方印）、「雲邨文庫」（朱文長印）。江戸後期の儒者市島屏山（一七九三～一八四六、名泰、字交通、別號追蠡）の舊藏。和田維四郎（一八五六～一九二〇）の手を経て岩崎文庫に入った。第五册奥附に補鈔有り。

顧野王、字希馮、吳の人、名門望族の出身で、博く經史に精通し、繪畫を得意とし、梁が亡び陳になると、天嘉（五六〇～五六六）初め史學士に補撰され、黃門侍郎・光祿卿に至る。著述が非常に多く、『玉篇』の他、『輿地志』・『符瑞圖』等がある。事蹟は『陳書』卷第三十・『南史』卷第六十九本傳に詳しい。孫強、富春の人、唐の處士。陳彭年、字永年、撫州南城の人。徐鉉に師事す。雍熙二年（九八五）進士。官は刑部侍郎・參知政事に至る。事蹟は

『宋史』卷第二百八十七本傳に詳しい。

『欽定四庫全書總目』經部小學類に『重修玉篇』三十卷が収録される。本書の内容については『欽定四庫全書總目』・余嘉錫『四庫提要辨證』卷二經部小學類を参照。その版本の變遷については、楊守敬『日本訪書志』卷三に詳しく、『古逸叢書』所收の古鈔本を筆頭に、北宋版一種・元版四種・明版一種を著録する。東洋文庫所藏本については、阿部隆一が『宋元版所在目錄』中で至正二十六年南山書院刊の明印とし、『日本國見在宋元版本志 經部』中で至正二十六年南山書院刊とし、かつ靜嘉堂文庫所藏本は同版の早印本であるとする。『中國古籍善本書目』には著録されていない。

六書統二十卷 元揚桓撰 元至大元年序江浙行省刊□□三年余謙修明印本 二十冊 XI 2, 19 岩崎文庫

左右雙邊縱二一・六cm横一六cm、有界八行十四字注文小字雙行二十三字、雙魚尾線黑口、無點。

首至大元年（一三〇八）倪堅「六書統序」、次劉泰「六書統序」、次「六書統序」（自序）、次「六書統目錄」、次

「六書統卷第一」／奉直大夫國子司業揚桓弼集」、以下至卷第二十。版心題「統」、又大小刻字數・篇名略稱（「形

「會」等）・卷次・丁數・刻工名等を記す。刻工は、彥明・章安・茅元吉・王寧・三木・木・許成・徐愛山・趙秀・

朱大存・張・中・壽・余・立・文・仲・子・明・侃・丑・于・胡・蔣・茂・惠・榮・森・屠・尸・朱・太・錢等。

無刊記。補刻記（數字分闕）三年八月江浙等處儒學提舉余謙補修」（卷第二十末、「余謙補」三字補寫）、又上に

「宋元書目行格表二」至正二年八月江浙等處儒學提舉余謙補修」と記した墨筆題簽を貼附す。卷第七第十三第一・

二丁、卷第十七第二丁を闕く。印記「魯宗室望／洋子當澗」（朱文長方印）、「錢無減／齋收藏」（朱文長印）、「聞濤／軒印」（白文方印）、「虞山林鶴田／寶硯齋所／藏書畫記」（朱文長印）、「孔夫／子々孫」（朱文方印）・「□□／□文」（朱文方印）・「道聽／塗說」（白文方印）・「天□／□□」（朱文方印）・「支夫／賤行」（朱文方印）。清初の著名な篆刻家林皋（一六五八〜？）。字鶴田、一字鶴顛、福建莆田の人。常熟に赴任し、虞山の麓に「寶硯齋」を築く。の舊藏。金鑲玉装。

揚桓、字武子、號辛泉、兗州の人。官は國子監司業に至る。古文字に精通し、書法にすぐれ、とりわけ篆籀に詳しかった。事蹟は『元史』卷第百六十四本傳に詳しい。余謙、元末・陶宗儀『書史會要』卷七に「余謙、字峻山、池陽人。官至江浙儒學提舉。善古隸。」とある。本書の書名は、六書によって諸字を統べるという著述の意圖によって名附けられた（『欽定四庫全書總目』經部小學類「六書統二十卷」條「大旨以六書統諸字、故名曰統」）。

本書は、倪堅の序によれば、至大元年に江浙行省で刊行されたものである。補刻記「三年八月江浙等處儒學提舉余謙補修」に元號を闕くため、補修の時期については説が分かれる。『東洋文庫所藏漢籍分類目錄經部』は元統三年（一三三五）（『增訂四庫簡明目録標注』の説と同じ）、阿部隆一『日本國見在宋元版本志經部』は後至元三年（一三三七）と推定し、清・陸心源『儀顧堂續跋』卷第四「元槧六書統跋」條は補刻記に「至正二年（一三四二）八月江浙等處儒學提舉余謙補修」とあるとするが、どの説が正しいかは判断しがたい。この版本の元明通修本が『中國古籍善本書目』に著録され、中國國家圖書館等に所藏される。東洋文庫所藏本について、阿部隆一は明印と見られるが、明修は入っていないとする。

廣韻五卷 宋陳彭年等奉勅撰 元刊本 有補鈔 五册 XI, 2, 10

雙邊縱二三・九cm横一七cm(卷第一第一丁裏)、有界九行小字雙行三十三字、雙魚尾小黒口、無點。

首「廣韻上平聲卷第一」(卷第一第一丁表補鈔)、以下至卷第五。版心題「廣韻」、又卷次・丁數を記す。無刊記。各册表紙に小韻を記した墨筆附箋を貼附す。印記「周印/□表」(白文方印)・「二字/抜□」(白文方印)・「詩書/敦/宿好」(白文方印)、「東坊城」(朱文長印)、「桃華/盃」(白文方印)。東坊城家(鎌倉末期の五條長經の次男茂長を祖とする公卿。家格は半家、儒道を家業とする)、及び東洋史學者富岡謙藏(一八七三〜一九一八、號桃華)の舊藏。墨筆書入有り。

本書は、宋眞宗の大中祥符元年(一〇〇八)、陳彭年・丘雍等が勅を奉じて、隋・陸法言『切韻』を増廣して宋代以前の韻を集大成したもので、歴史上、完全な形で現在まで保存され、かつ廣く流傳してきた最も重要な韻書である。現在、詳注本と略注本の二種の系統の版本が傳存する。このことについて、朱彝尊は「重刊廣韻序」の中で、略注本は明代の内府刊本であり、中涓が注釋の字數を均等にしようとして、取捨刪略したものであると述べている。これに對し、四庫館臣は朱說の誤りを斥け、中涓が刪略したのではなく、元刊本がすでにこの状態であったのである(詳しくは『欽定四庫全書總目』經部小學類「廣韻五卷」條を參照)。楊守敬は日本で入手した三種の元刊本によって朱說の誤りを證明し、さらに略注本は宋室南渡の前後に陳彭年重修本を刪節してできあがったものであり、四庫館臣が言うような重修以前のテキストではないとする

(詳しくは『日本訪書志』巻三「廣韻五卷 元槧本」條を参照)。

元明代に流通していたのは略注本であり、東洋文庫所藏本も略注本の系統に屬するものである。阿部隆一はこれを『日本國見在宋元版本志經部』等に収録しておらず、かつ『中國古籍善本總目』によれば、元版には本版のよう
雙邊・九行・雙魚尾・黒口系の版口を持つ版本がなく、明版三種を著録する。あるいは本版も明刊本であるのかも
しれない。なお詳注本については、周祖謨『廣韻校本』(中華書局、一九六〇年十月)「序言」を参照されたい。

廣韻五卷 宋陳彭年等奉勅撰 明永樂十三年與畊書堂刊本 五册 XI 3 A a 7 岩崎文庫

雙邊縱二〇・九cm横一二・八cm、有界十二行小字雙行三十字、雙順魚尾小黒口、無點。

首天寶十年(七五二)「陳州司馬孫恂唐韻序」、次「廣韻上平聲卷第一」、以下至卷第五。版心題「韻」、又卷次・丁
數を記す。木記「永樂乙未(十三年、一四一五) 良月/與畊書堂新槧」(孫恂序末)。題簽題「廣韻」(書貼)。各册
裏戻に補寫あり(第三册のみなし)。印記「松平/確堂/藏書」。江戸後期の美作津山藩主松平齊民(一八一四〜
一八九二)の舊藏。

本版もやはり略注本の系統に屬するものであるが、あまり傳存しておらず、『中國古籍善本書目』にも著録されて
いない。

新彫改併五音集韻十五卷 金韓道昭改併重輯 元前至元二十六年琴台張仁刊本 有補鈔 十五册 XI 2 24 岩崎文

左右雙邊縱二二・五cm横一四・三cm、有界十三行小字雙行三十三字乃至三十五字、雙順魚尾白口又小黑口、無點。首崇慶元年（一二二二）韓道昇「己丑新彫改併五音集韻序」、次「己丑新彫五音集韻序」、次「己丑新彫改併五音集韻總目錄」、次「新彫改併五音集韻上平聲卷第一／溥陽松水昌黎郡韓道昭改併重編」、以下至卷第十五、次「新集背篇列部之字補添印行」、次「己丑重編雜部」。版心題「韻」、又刻字數・卷次・丁數を記す。刊記「己丑（前至元二十六年、一二八九）歲次長至日重刊」（「己丑新彫五音集韻序」末）。總目錄末に「入冊檢韻術」あり。崇慶元年韓道昇序末に「眞定府松水昌黎郡韓（孝彥）次男韓（道昭）改併重編／男韓（德恩）姪韓（德惠）婿王（德珪）同詳定／琴台張（仁）開板」とあり。卷第十五末に韓道昭の門人の姓名を列記す。「新集背篇列部之字補添印行」末に「松水昌黎門人洩川竇慶進補添」とあり。小黑口の丁には匡郭の寸法が白口と同じものや、縦が1cm強小さめのものがある。題簽題「元稹五音集韻」（書貼）。朱點書入有り。印記「漱芳閣／鑑臧印」（朱文長印）・「梅堂／經眼」（朱文方印）・「漱芳／閣／清賞」（朱文方印）、「木正／辭／章」（白文方印）。江戸後期の武士淺野長祚（一八一六～一八八〇、號梅堂・漱芳閣）、幕末・明治の國學者木村正辭（一八二七～一九一三）の舊藏。蟲損が甚だしく、補修跡や補鈔が多い。第十三冊副葉に補鈔有り。

東洋文庫所藏本は、各巻の卷頭書名・末題に異同が多い。以下に列記する。

新彫改併五音集韻 卷第一首

己丑新彫改併五音集韻 卷第一尾、第二第五首、第十二首尾

改併五音集韻 卷第二尾、第三首、第四第六首尾、第七首、第八首尾、第九第十第十五首

至元新彫改併五音集韻 卷第三第五尾

大元新彫改併五音集韻 卷第七尾、第十一首

大朝新彫改併五音集韻 卷第九第十第十一第十三尾、第十四首

大安新彫改併五音集韻 卷第十三首、第十四尾

〔崇慶重編改併〕五音集韻卷終 卷第十五尾 *〔一〕は補鈔。

韓道昭、字伯暉、號昌黎子、韓孝彥の次子。阿部隆一の考證によれば、東洋文庫所藏本は金崇慶刊本（書影は『中國版刻圖録』圖版二六二を参照）の重刊本であり、それ故に「崇慶」が「己丑」に改められている所が多いが、「大安」（崇慶の前の元號、一二〇九～一二二一）等の文字が直しきれずにそのまま残っている（『日本國見在宋元版本志經部』を参照）。また總目錄の前にあるべき郭知玄序・孫愔序を闕き、韓道昭『改併五音類聚四聲篇』の卷首に置かれるべき「新集背篇列部之字補添印行」・「己丑重編雜部」が末尾に混入している。出版事項について、阿部隆一は「元前至元二六年（一二八九）刊（琴台張仁）」と記すだけで根據を明示していないが、金崇慶刊本の崇慶元年韓道昇序末の「汶川荆珍開板」を、本版では「琴台張仁開板」に作り、その張仁が己丑の年である前至元二十六年に『改併五音類聚四聲篇』を刊行しているから、前至元二十六年に琴台の張仁が重刊したものと考えるよからう。

『中國古籍善本書目』に金崇慶元年荆珍刊本・元刊明修本・明刊本が著録され、崇慶本が中國國家圖書館（存十二

卷)、元刊明修本が上海圖書館等に所藏される。

重刊五音篇韻四種 明萬曆二十三年晉安芝山支提山刊本 十六冊 XI 3 A a 13

第一至七冊

萬曆己丑重刊改併五音類聚四聲篇海十五卷 金韓孝彥撰 金韓道昭改併重輯

雙邊縱二八 cm 横一八・三 cm (篇序第五丁表)、有界十行十八字注文小字雙行三十二字相當、雙魚尾白口、無點。

首萬曆旃蒙協洽(乙未、二十三年、一五九五)徐燻「重刊五音篇韻序」、次「重刊改併五音類聚四聲篇海集韻序」(以下版心題「篇序」、次泰和八年(二二〇八)韓道昇「重編改併五音篇序」、次「五音改併增添明頭號樣」、次「十韻號頌」、次「五音檢篇入冊頌」、次「重編者等題名」、次「萬曆己丑重刊改併五音類聚四聲篇海總目錄」、次「重編併部依三十六母再顯之圖」、次「新集背篇列部之字補添印行」、次「辛卯重編增改雜部」、次「大明萬曆己丑重刊改併五音類聚四聲篇卷第二」、以下至卷第十五。版心題「篇」、又卷次・丁數を記す。刊記「錢塘徐(象梅)書/晉安芝山開元寺比丘(鎮燦/如巖/鎮西) 離閣(鎮定/性燈) 檢對/支提山比丘大遷主緣/麻沙(江甫) 録(徐燻序末)、「福建支提山華藏寺末學僧如(啓) 募化建寧府建陽縣/∴以上衆信喜捨資財刊刻四聲篇十卷之二卷壹完上報/四恩三有同種般若之因共植菩提之果現世門庭各願昌隆者」(卷第十一末)。「重刊改併五音類聚四聲篇海集韻序」より「辛卯重編增改雜部」まで版心題を「篇序」に作り、丁附は第五至三十丁。この部分が本書の卷第一に相當する。「總目錄」の前にある題名は以下の通り。

眞定府松水昌黎郡韓〈孝彦〉次男韓〈道昭〉改併重編

兄曰〈道皓〉 弟曰〈道昉〉 男曰〈德恩〉

姪曰〈德惠〉 婿王〈德珪〉 同詳校定

趙州荊〈璞〉同編 添補少闕字數石〈志良〉

單州張〈用〉 男曰張〈仁〉 開板印行 寧昌李〈曷〉書

昌黎諸門人／＼

已上諸公同詳校正

昌黎門人 洙川扶風郡竇〈慶進〉重校正

「新集背篇列部之字補添印行」末に「大金丙辰松水昌黎門人洙川竇慶進補添／大明辛卯五月端陽日刊完」、「辛卯重編増改雜部」末に「崇慶己丑新集雜部至今成化辛卯刪補重編卷〈終〉」とあり。卷第二卷首に「目」二丁を附す。卷第十一第一丁のみ三魚尾。なお第一冊副葉に「篇序ノ一至四頁／落丁」との墨筆書入がある。版心を見ると、「重刊改併五音類聚四聲篇海集韻序」が「新篇序」一至二丁、「重編改併五音篇序」が「篇序」五至六丁となっており、確かに落丁があるが、早稻田大學圖書館の古典籍總合データベースで公開される萬曆三年至十七年刊本も同じ状態であり、原闕と見られる。無印。

韓孝彦、字允中、眞定松水の人。本書は、金の明昌承安間（一一九〇～一二〇〇）に韓孝彦の手で完成し、泰和八年に次子韓道昭が四百四十四部に改併したものである。『欽定四庫全書總目』は「四聲篇海」の名で經部小學

類存目に収録する。

本書の版本の變遷については、「重刊改併五音類聚四聲篇海集韻序」に次のようにある。

而重加刪補詳校、彙萃二編、則國朝沙門戒璿也。厥後大慈仁寺釋真空又考諸家篇韻、凡經史所不載、重譯貝經、玄言梵語絕域荒微之文、搜羅纂入而部分訓釋亡遺焉。又作爲檢篇韻貫珠集玉鑰匙門法、提綱撮要、指示捷簡矣。篇海集韻故刊于成化之初、而歲久字多漫滅、今僧錄左善世大慧寺子淨持行高嚴、尤邃于梵學、乃囑其徒衍法師覺恒募緣重鈔諸梓而真空實校正之、併以貫珠集諸門法及安西劉士明所著切韻指南一卷刻焉。于時司禮太監張公雄實振賞倡施而一時貴人達官景從爭先、正德乙亥告成。

この序には署名がないが、萬曆三年至十七年刊本の序末には正徳十五年（一五二〇）滕霄の署名「正徳十五年庚辰秋八月望後／賜進士出身奉直大夫 太子洗馬兼翰林／國史編修 經筵講官建安滕霄序」が刻されている。また沈津『美國哈佛大學哈佛燕京圖書館藏中文善本書志』著録の萬曆三年至十七年刊本にも正徳十五年滕霄序があるというから、萬曆二十三年に重刊される際にこの一文が削られたのであろう。正徳十年刊本以降、萬曆己丑重刊改併五音類聚四聲篇海十五卷は大明萬曆己丑重刊改併五音集韻十五卷・新編篇韻貫珠集八卷・經史正音切韻指南一卷とともに四種一セットで合刊されるようになった。東洋文庫所藏本は、徐燧「序」によれば、八年の歳月をかけて校正・資金の調達・版本の刊刻が行われ、萬曆二十三年に完成したものであり、その底本は萬曆三年至十七年刊本と推測される。

萬曆二十三年晉安芝山支提山刊本は、『中國古籍善本書目』に著録され、北京師範大學等に所藏される。

第八至十四册

大明萬曆己丑重刊改併五音集韻十五卷 金韓道昭撰

雙邊縱二七・五cm横一八・四cm、有界十行小字雙行三十二字、雙魚尾白口、無點。

首崇慶元年（一一二二）韓道昇「至元庚寅重刊改併五音集韻序」、次崇慶元年「至元庚寅重刊改併五音集韻序」、次儀鳳二年（六七七）郭知玄「至元庚寅重刊改併五音集韻序」、次天寶十年（七五一）「萬曆己丑重刊改併五音集韻／陳州司法孫恂序」、次「至元庚寅重刊改併五音集韻目錄」、次「大明萬曆己丑重刊改併五音集韻上平聲卷第一／溇陽松水昌黎郡韓道昭改併重編」、以下至卷第十五。版心題「韻」、又卷次・丁數を記す。刊記「大明萬曆甲午春日重刊五音集韻至丙子孟秋吉日完」（卷第十五末）。韓道昇序末に「眞定府松水昌黎郡韓（孝彥）次男韓（道昭）改併重編／男韓（德恩）姪韓（德惠）婿王（德珪）同詳定」とあり。卷第一末に「昌黎諸門友人同校正」、卷第十五末に「雙聲疊韻法」あり。無印。

刊記に萬曆甲午春から丙子孟秋にかけて開版したとあるが、甲午は二十二年、丙子は四年であり、記載に誤りがあるようである。なお、この刊記は、萬曆三年至十七年刊本の刊記「大明萬曆乙亥（三年）夏日重刊五音集韻至己丑（十七年）孟秋吉日完」（卷第十五末）を援用したものである。

第十五册

新編篇韻貫珠集八卷 明釋真空撰

雙邊縱二八・八cm横一八・三cm、有界十行十六字注文小字單行十六字又小字雙行十六字或三十二字、雙魚尾白口、

無點。

首弘治戊午（十一年、一四九八）劉聰「重刊檢篇韻貫珠集序」、次「新編篇韻貫珠集總目」、次「新編篇韻貫珠集（一之八）／京都大慈仁寺後學沙門清泉真空編／五音篇首歌訣第一」、次「新編篇韻貫珠集／京都大慈仁寺後學沙門清泉真空編／五音借部免疑海底金第二」、次「新編檢五音篇海捷法總目第三」、次「貼五音類聚四聲篇海捷法第四」、次「訂四聲集韻卷數并韻頭總例第五」、次「貼五音四聲集韻捷法總目第六」、次「創安玉鑰匙捷徑門法歌訣第七」、次「類聚雜法歌訣第八」、次正徳八年夏玄「直指玉鑰匙門法序」。版心題「貫珠集」（第二丁のみ「貫珠集」に作る）、又丁數を記す。無刊記。劉聰序末に「大慈仁寺後學沙門清源性徳〈真空〉剏編」とあり。「類聚雜法歌訣第八」末に「末附直指玉鑰匙門法」とあるが、この一文と夏玄序は萬曆三年至十七年刊本にない。第二十二・第三十一の二丁のみ小黒口。無印。

本書は『欽定四庫全書總目』經部小學類存目に著録される。また萬曆五年刊本が周中孚『鄭堂讀書記』に著録される。

第十六册

經史正音切韻指南一卷 附部首一卷 元劉鑑撰 附錄明釋真空撰

單邊又雙邊二一・八cm横一五・五cm、有界十行十六字、單魚尾又雙魚尾白口、無點。

首至元二年（一三三六）劉鑑「經史正音切韻指南序」、次「通廣偏狹門」等九條併「五音分譬之圖」、次「平仄指掌圖」、次「等韻圖」、次「直指玉鑰匙門法」、次「新編篇韻貫珠集／京都大慈仁寺後學沙門清泉真空編／五音篇

首歌訣第二」（版心題作「指南部首」）。版心題「指南」、又丁數・刻工名を記す。刻工は、王朝・王・月中。刊記「信官汲祐刊」（「直指玉鑰匙門法」末）。無印。

劉鑑、字士明、關中の人。本書には卷頭書名がなく、書名は劉鑑序に従う。本文部分は、「平仄指掌圖」（第二丁表）に始まり、等韻圖（第一丁裏至第二十五丁表）・「直指玉鑰匙門法」（第二十五丁裏至十五丁裏。第二十五丁の次で第八丁に戻る）・「指南部首」（第十六丁表至第二十丁裏）からなる。『四庫全書』經部小學類に収録される。東洋文庫所藏の『重刊五音篇韻』四種の中で、本冊のみ匡郭の寸法が小さい。

洪武正韻十六卷 明樂韶鳳宋濂等奉勅撰 明刊本 十冊 XI 3.A.a.2

單邊縱二一・八cm横一四cm、有界八行十二字小字雙行二十四字、雙魚尾白口、無點、頭注。

首洪武八年（一三七五）宋濂「洪武正韻序」、次「凡例」、次「洪武正韻目錄」、次「洪武正韻卷第一」、以下至卷第十六。版心題「洪武正韻」、又卷次・丁數を記す。無刊記。魚尾には「人」・「天」・「上」・「○」等の符號が白文で彫り込まれているものが多い。これらは刻工が自分の彫った版木の目印に用いたものであろう。頭注内の「見」字にしばしば四聲點が見られる。卷第四の前に「下平聲」目錄、卷第七の前に「上聲」目錄、卷第十の前に「去聲」目錄、卷第十四の前に「入聲」目錄有り。帙題簽題「洪武正韻」（書貼）、又「字野明霞／舊藏／鐵齋題簽」とあり。題簽題「洪武正韻」（書貼）。第一冊卷首の副葉に富岡鐵齋が『先哲叢談』から抄録した字野明霞の傳記、卷尾の副葉に鐵齋が家藏の『明霞先生遺稿』八卷から抄録した御醫山本晉の享和三年（一八〇三）手跋がある。印記「宗／

寶」(朱文方印)・「□」(朱文圓印)、「明霞／軒／藏書」(朱文方印)、「鐵老齋」(朱文長印)。江戸中期の儒學者宇野明霞(一六九八～一七四五、名鼎、字士新、小字三平、號明霞軒)、明治大正期の文人畫家富岡鐵齋(一八三七～一九二四、原名猷輔、のち道節・百煉に改名す。字無倦、號裕軒・鐵史・鐵崖・鐵道人・鐵齋等、京都の人)の舊藏。卷第九第一丁・卷第十三第十二丁・卷第十五第二丁に補鈔あり。

樂韶鳳、字舜儀、全椒の人。朱元璋の兵部尚書となり、のち翰林侍講學士を授けられ、宋濂等とともに『洪武正韻』を纂修した。事蹟は『明史』卷第三百三十六本傳に詳しい。本書は、『四庫全書總目提要』經部小學類に收録される。頭注の刻された同版式の版本は、『中國古籍善本總目』によれば、中國國家圖書館・北京師範大學圖書館等に所藏される。

正韻便覽四卷 明童漢臣裁定 明劉望之校輯 明嘉靖十五年序刊本 五册 XI 3, A. a. 8

單邊縱一七・二cm横九・一cm、有界六行十四字注文小字雙行二十八字、雙魚尾白口、無點。

首洪武八年(一三七五)宋濂「洪武正韻舊序」、次嘉靖丙申(十五年、一五三六)劉望之「正韻便覽序」、次「正韻便覽凡例」、次劉稽等「正韻便覽目錄」、次「正韻便覽卷之一／錢江童(漢臣)仲良裁定／内江劉(望之)高霖校編」、以下至卷之四、次嘉靖丙申童漢臣「正韻便覽後序」、次申旆「便覽跋」(版心)。無版心題、又篇名・丁數、及び「幾號」の形で全丁の通し番號を記す。無刊記。印記「悟珠／道人」(白文方印)、「周印／公績」(白文方印)・「智／卿」(朱文方印)、「蕉／□／齋」(朱文方印)。

劉望之、字商霖、號一厓、四川內江の人。嘉靖五年進士。剛正有爲な人物で、初め給諫の直言によって時の宰相に忌諱され、魏縣の縣丞に左遷されたが、しばらくして貴陽の參議となり、苗夷を平定した功績により、山西布政使に轉じ、南京大理卿に至る。著書に『正韻便覽』の他に『一巖文集』・『魏縣志』等がある。『雍正四川通志』卷第九に傳あり。

童漢臣、字仲良、號南衡、錢塘の人。嘉靖十四年（一五三五）進士、魏縣知縣を経て御史に任じられたが、嚴嵩に逆らつて湖廣布政司都事に左遷され、のち江西副使に至つて致仕す。事蹟は『明史』卷第二百十本傳に詳しい。

本書について、明・朱陸樺『萬卷堂書目』卷一小學、清・黃虞稷『千頃堂書目』卷三小學類は童漢臣の『正韻便覽』四卷と著録するが、各卷卷首の記載と劉望之序・童漢臣後序によれば、嘉靖十五年に魏縣縣丞であつた劉望之が校編し、魏縣知縣であつた童漢臣が裁定したものである。

本書はわずかに明代の書目に見えるのみで、明以後の流傳は非常に少ない。『四庫全書』に収録されず、清代以降の書目に言及されず、現在各大學圖書館に收藏されていない。そのため後世の學者等によつて亡佚したものと考へられてきた。たとえば許嘉璐『傳統語言學辭典』（河北教育出版社、二〇一〇年三月）「正韻便覽」條に「韻書、明童漢臣撰、已佚」とあり、また曹述敬『音韻學詞典』（湖南出版社、一九九一年九月）「童漢臣」條に「著有『正韻便覽』4卷、今亡佚。」とある。以下に劉望之序・凡例・目錄・童漢臣後序を収録して、學界の參考に供することとしたい。

正韻便覽序

側惟聖王之御世也以道斯世之會道也以文書文之同道之與也字韻之正文之昭也疏譚闡幽敷言在治咸必由之是故五言要須審聽三重務在考文其功用之大豈直足資翰藻題詠之具而已哉顧音韻本諧於律呂而氣習每間於方國粵自書契以來卽有四聲二氣之辨風雅尚矣秦漢浸訛逮至沈約乃復泥己見據方言欲比而同天下之韻固不免如東冬清青之類分析太過翻根沾葉之類音響欠通者奈何歷代沿尚莫或正之欽惟我太祖高皇帝承運御世首重考文爰命儒臣撫據毛晃舊文纂修洪武正韻探噴拾遺併同摘異切釋詳備訛舛復明竅爲臨文用字之便而百餘年來鮮克遵尚閒有用者衆咻爲訛何謂哉蓋緣舊韻類多袖本而正韻官板浩瀚學者染濡便覽而憚翻閱遂至疑耳信目生今反古惑滋甚矣夫以孔子大聖尚不敢倍違周制彼嬴秦何如時也李斯且因字義有與秦文不合者咸奏罷而同之矧茲正韻訂自我祖又今四海一統六合同風文運之隆迥軼前代獨茲正韻鮮見遵行固非聖明今日會極同文之盛治亦豈太祖當日嘉惠儒林之盛心也哉望之末學閒嘗習閱竊有憾焉特以謫調得暇輒不自憚謏謬乃商度尹正童公分韻授例責付庠生字學精博者五人撫錄節略謹用編次梓行雖不敢妄必人人同然以爲可用亦庶幾乎因便覽而悟憲章回左轍以就王路或未必無小補云

嘉靖歲在丙申無射月重陽日魏縣添註縣丞內江劉望之序

正韻便覽凡例

- 一 韻既專主洪武却又備附舊韻及分別去取并新增等類字眼蓋欲用之者易擇而讀之者易辨也
- 一 字義俱宜切音及有雖係一韻而音聲實別該另圈註者今皆未備以非方尺袖本所能盡載故略之也

一 除尋常易曉字眼不釋外凡該用釋義者俱依正韻內所釋者備之若舊韻內釋義有與正韻小異者仍兩備之其有一字而釋義類多難於備載然尚可以意曉解者則置之若夫同一韻中有一字兩義如種種追追焉焉徹徹等類該同韻異呼原係正韻內所取者則不敢以重復削去仍兩存之也

一 凡言舊者謂沈毛諸子本韻凡言正者謂洪武正韻凡用□者以代韻字皆從省文也

一 七音中如東支先蕭董紙送寘屋質等類韻宗數目次序俱遵正韻編定舊例不敢增減紊亂故韻宗首一字獨用白書正以識別也凡每韻宗下所收舊韻內字眼除相同外亦有原係一連各韻宗內收併者又有原係隔遠各韻宗內收來者今將原係一連收併者止書曰舊某韻舊某韻正併此若係隔遠收來者則書曰舊無正增不復指言某處收來之故其有摘出不收字眼雖別韻內又有收處但恐本韻下欲考舊韻原數無所憑據故附書曰舊韻有正去之或書曰舊某韻正去之不復指言某處某處復收其彼收處亦止書曰舊無正增不復指言從此處收去雖跡涉重出無用然取便於各韻下查考免費臨時翻閱之勞

正韻便覽目錄

平聲 一東 二支 三齊 四魚 五模 六皆 七灰 八眞 九寒 十刪 俱魏縣庠生劉楷考集
 平聲 十一先 十二蕭 十三爻 十四歌 十五麻 十六遮 十七陽 十八庚 十九尤 二十侵 二十一覃 二十
 二鹽 俱魏縣庠生劉本灝考集
 上聲 一董 二紙 三薺 四語 五姥 六解 七賄 八軫 九旱 十彥 十一銑 十二篠 十三巧 十四哥 十

五馬 十六者 十七養 十八梗 十九有 二十寢 二十一感 二十二琰 俱魏縣庠生申應考集
去聲 一送 二寘 三霽 四御 五暮 六泰 七隊 八震 九翰 十諫 十一霰 十二嘯 十三效 十四箇 十
五禡 十六蔗 十七漾 十八敬 十九宥 二十沁 二十一勘 二十二豔 俱魏縣庠生王永壽考集
入聲 一屋 二質 三曷 四轄 五屑 六藥 七陌 八緝 九合 十葉 俱魏縣庠生張廷鳳考集

正韻便覽後序

中川劉諫議者抗志風節棲神史籍搜覽之暇挾帙過予曰正韻便覽予覽而嘆曰粵自兩儀攸判萬籟之機形六書聿興百音之道備是故雨風露雷天假之鳴山川草木地作之響鳥獸殊音均具宮商之理蟲虻微竇咸成清濁之文物有然矣況於人乎蓋自蒼臺發其玄鍵嶰管啓其幽關感氣成聲感聲成韻聲韻之道寔肇於茲然揆諸羣物有五氣之異齊釋諸方言有七音之異向紛綸咸蕤不可勝數故有字統字林綜其形趣韻集韻略闡其精微爾雅玉篇說文聲譜述作頗衆要樞則一稟非發天地之房贊同文之治豈徒繕綵詞廣瑠飾翰墨而已哉結繩以前遐哉邈乎其詳不可得聞已秦漢以降訓詁是興而聲音莫究雖代有名儒志欲會其同異諧其聲體或聞於風氣之偏或狃於聲聞之蔽致有文多漏誤韻失中和故陸生切而未詳司馬廣而未正尚有沈約舊韻自梁迄宋作者因之習而不察是誠分別過精而克諧之道悖焉嗚呼古有擊壤之歌南風之詠雅頌之和平離騷之典則咸能鼓舞皇休發揚清節擲響一時垂藻萬世奚嘗狃于齒舌以稱休美哉及我皇祖灼見沈約之訛一以中原雅韻爲正比而同之訂爲正韻是誠足以會八風之精建中和之極生民以來未有加者于茲百季尚有拘於故冊襲於夙好作者不一鮮克由之諫議劉公蓋有感焉綜而輯之製爲便覽主以正韻遵制也參以舊韻存古也分別同異切繹比類典學也釋用舊文註兼通義廣意也

嗚呼宣尼學禮志切從周賈誼言治論惟尚漢易垂同聲之訓書稱協和之美作者執此以覽當有以得諫議之意于時嘉靖歲次丙申閏拾貳月朔旦魏縣知縣錢塘童〈漢臣〉謹序

便覽跋

門人申〈旒〉跋曰樂經亡律呂失傳天下無聲音之辨久矣欲興禮樂必同書文欲同書文必正韻學故曰聲音之道與政通也自沈約出而天下之音吳聖朝匡以正韻其習至今猶未已者以舊韻類多袖本便覽耳吾師愷正韻之弗顯而亦袖本刻之以塞時好固轉移風尚之一機也豈可與便登押娛翰墨者例觀耶或問尊正韻而並載舊韻者何居〈旒〉曰兩韻不比訛正奚辨是故綱以正韻昭其則也附以吳音別其嫌也同者必進遺者必增嘉其善而救其失也誤分者併誤合者析駁其淆而嚴其辨也則昭而正義明嫌別而謬迹著增去進退比類分合而得失取舍之故見自將不令而釋不招而來其功於正韻者豈細哉孔子之於詩也善惡竝載今制亦祖朱傳而不刊小序訛正兩存美惡固易辨也美惡辨則人心同人心同則其趨自定矣吾師於書文始此意歟方今固禮樂之期也吾師而用禮樂其有興乎〈旒〉不佞亦願執鞭於聲音律呂之途而以邵子之學爲同文助謹跋

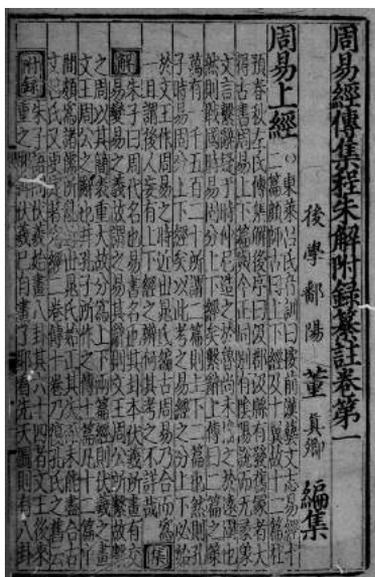
【土禮居黃氏叢書本『儀禮』三本字樣對照表】

黄 本：嘉慶二十年（1815）吳門黃氏讀未見書齋景刊本 土禮居黃氏叢書之一
 崇文本：同治九年（1870）楚北崇文書局據土禮居黃氏叢書本重刊
 石印本：光緒十三年（1887）上海蜚英館據土禮居黃氏叢書本石印

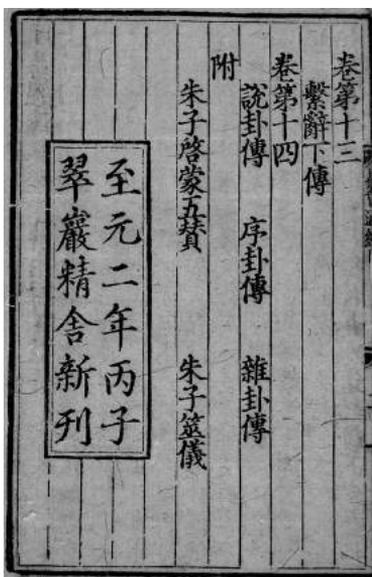
卷	丁	行	字	說 明
一	1	a4, b13	緇	黄本：右旁上部「𠂔」の間に横棒有り。 崇文本：黄本に同じ。 石印本：右旁上部「𠂔」の間に横棒無し。 なお2丁 a2・3行の「緇」字は三本同じ。
		b2	玄端負東塾	黄本：闕筆有り。 崇文本：黄本に同じ。 石印本：避けず。
	2	b5	主人揖贊者 與賓	黄本：「目」末筆の横棒が左に出ない。 石印本：「目」末筆の横棒が左に出る。 崇文本は黄本・石印本の間に位置する。
		b6	揖先入	黄本：「耳」末筆の横棒が右に出ない。 崇文本：黄本に同じ。 石印本：「耳」末筆の横棒が右に出る。 なお、2丁の「揖」字皆同じ。
	3	a5	贊者卒紼	石印本：左偏の第一筆は運筆がより左に向き、字様が鋭い。 黄本・崇文本はほとんど同じで、石印本と明らかに字様が異なる。
	5	b2	冠而字之敬 其名	黄本：闕筆有り。 崇文本・石印本：避けず。
		b3	章甫殷道也	黄本：闕筆有り。 崇文本・石印本：避けず。
		b5	周弁殷尋夏 收	黄本：闕筆有り。 崇文本・石印本：避けず。
		b13	殷（鄭注、 二箇所）	黄本：闕筆有り。 崇文本・石印本：避けず。
	二	1	b13	去蹄舉肺
6		b7	請受	黄本：右旁下部「冂」。 崇文本：右旁下部「冂」。ただし黄本と運筆がやや異なる。 石印本：右旁下部「月」。補刻のように見える。

三	1	a14	敢不敬從	黄本：闕筆有り。 崇文本・石印本皆避けず。
四	3	b4	西階上	黄本：第二筆の横棒が上にはねる。 崇文本：普通の字様。 石印本：「上」。
	5	b11	揖讓如初	黄本：右旁下部「耳」末筆の横棒が右に出ない。 崇文本：黄本に同じ。 石印本：右旁下部「耳」末筆の横棒が右に出る。
五	3	b8	執越内弦	黄本：闕筆有り。 崇文本：闕筆有り。 石印本：避けず。 第9行鄭注の「弦」二字、黄本・崇文本は全て闕筆有り、石印本は闕筆とそうでないものと有り。
	14	b2	敬殺（鄭注）	黄本：闕筆有り。 崇文本・石印本：避けず。
六	5	b8	君意殷勤（鄭注）	黄本：闕筆有り。 崇文本・石印本：避けず。
	7	a7	公意殷勤（鄭注）	黄本：闕筆有り。 崇文本・石印本：避けず。
		b11	苟敬席	黄本：闕筆有り。 崇文本：避けず。 石印本：原闕のところ、後に書き加えたように見える。
		b12-14	敬（鄭注、四箇所）	黄本：闕筆有り。 崇文本：避けず。 石印本：末筆を書き加えたように見えるものが多い。
七	5	b5	後首内弦	三本皆闕筆あり。しかし石印本は黄本と末筆が明らかに異なる。石印本は末筆のはねが界線に附いているが、黄本ははっきり離れている。
	14	a5	降席敬也（鄭注）	黄本：闕筆有り。 崇文本・石印本：避けず。
八	3	b14	君子於其所尊不敢質敬之至也（鄭注）	黄本：闕筆有り。 崇文本：避けず。 石印本：避けず（字が小さく不鮮明なため、書き加えたかどうかは不明）。

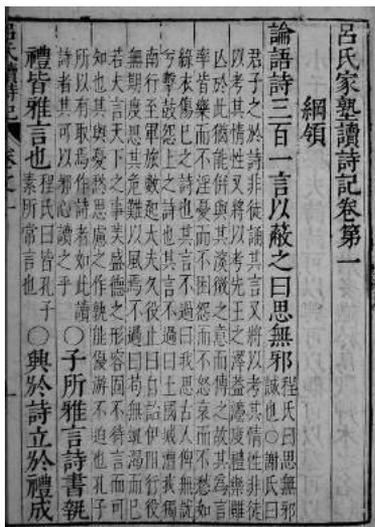
八	4	a8	敬 (鄭注、 二箇所)	黄本：闕筆有り。 崇文本・石印本：避けず。
	5	a8	前莞 (鄭注)	黄本：闕筆有り。 崇文本・石印本：避けず。
	6	b11	殷勤 (鄭注)	黄本：闕筆有り。 崇文本・石印本：避けず。
	7	a4	敬 (鄭注)	黄本：闕筆有り。 崇文本・石印本：避けず。
	8	a1	讓不言 (鄭 注)	黄本：闕筆有り。 崇文本・石印本：避けず。



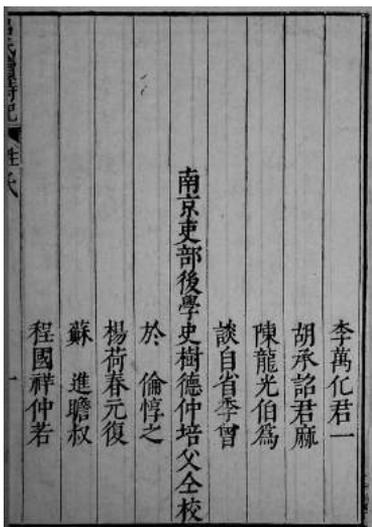
06周易經傳集程朱解附錄纂註卷1首



05周易經傳集程朱解附錄纂註. 刊記



08呂氏家塾讀詩記卷1首



07呂氏家塾讀詩記. 全校姓氏

禮書卷第八
冠制
母追冠
委貌冠
太古編布冠
後世編布冠
冠命
同服凡甸冠弁服
存冠衣不純素
裳素冠徹緣厭冠不入公門
禮弓曰古者冠縮終今也
衛結於冠
卿大夫士厭冠哭於大廟將軍大夫之喪既除喪越人

10禮書卷 8 首

儀禮卷第一
士冠禮第一
士冠禮筮于廟門
主人玄冠朝服纁帶素鞶即位于門東西面
人取即位于西方東而北上
所封者具饗于西塾
進受命於主人
即
告吉
若
不
吉
則
筮
速
日
如
初
儀
筮
席
若
不
吉
則
筮
速
日
如
初
儀
筮
席

09儀禮卷 1 首

乾隆二年正月二十四日奉
旨開載監修總裁分撰校訂校錄校刊監造諸
臣名銜
總裁
分撰
日講官起居注詹事府少詹事兼翰林院侍講學士臣王封濬
日講官起居注詹事府少詹事兼翰林院侍講學士臣高士奇

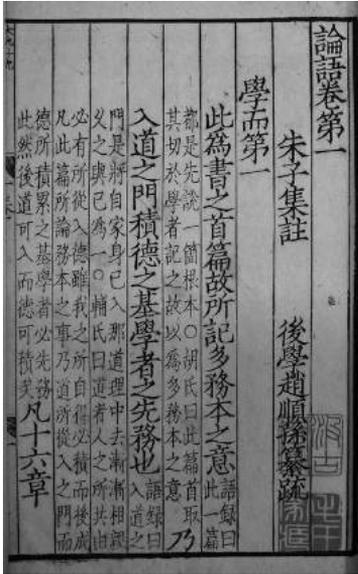
12日講春秋解義 首

禮書卷第二十一
左宣義郎太常博士陳 祥道上進
麟 拜 紛悅 礪
金燧 木燧 鑿
禮曰子事父母婦事舅姑左佩小麟右佩大麟
子佩饒毛氏曰麟所以解結鄭氏曰麟頭如牛以象骨
為之說文曰麟佩角就帛可以解結然則佩麟成人之
服也衛惠公跟成人之服而有童子之行故詩刺之
麟或以象
名以象為之

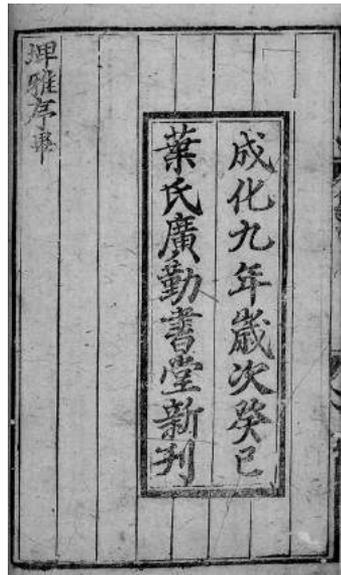
11禮書卷21首



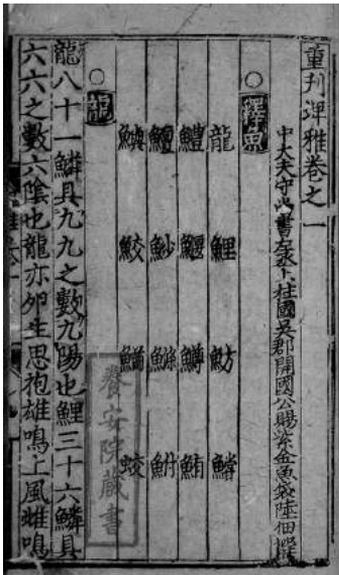
17孝經行義卷 1 首



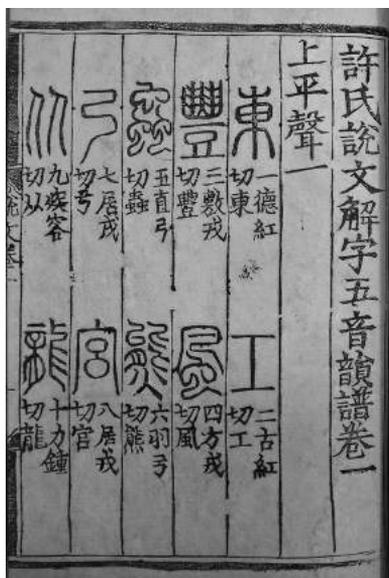
18論語纂疏卷 1 首



19重刊埤雅. 刊記



20重刊埤雅卷 1 首



21許氏說文解字五音韻譜卷1首



23大廣益會玉篇卷1首



22大廣益會玉篇，刊記



28 (明版) 廣韻·刊記·卷1首



30新彫改併五音集韻·刊記

29新彫改併五音集韻·刊記

